



寝覚新緑



吉野花雲

6 四時ノ名勝 川端玉章

四面のうち二面

明治三十二年(一八九九)

絹本着色

各一六六・四×八四・九

明治天皇の御下命により、帝室技芸員を中心とした二十三名の作家が、一九〇〇年(明治三十三年)のバリ万国博覧会へ出品するための作品を制作することとなった。川端玉章(一八四二〜一九一三)もその中の一人であり、そこで玉章が画題に選んだのが吉野山(奈良)、寝覚の床(長野)、碓氷峠(群馬)、巖島(広島)という日本の四つの景勝地であった。

「吉野花雲」は前景の土坡を明瞭に描く一方で、中景以降は淡くぼかし、遠近感とともに立ちこめる春霞までも表現している。「寝覚新緑」は、白い花崗岩とその間を流れる清流の深い碧が美しいコントラストをなしている。玉章は制作にあたって、いずれの地にも足を運んでおり、一目千本と謳われる吉野山の桜の壮観な眺望や、上方から実際に俯瞰しているような自然な奥行きを感じさせる寝覚の床の構図などに、実写生の成果が表れている。

玉章は京都の高倉二条に生まれ、中島来章に師事した。二十代半ばで京都から江戸へと出ると、明治二十三年(一八九〇)に東京美術学校の教授となった他、自らも画塾を開くなど、東京における近代円山派隆盛の礎を築き、同二十九年には帝室技芸員を拝命した。本図制作中、玉章は「今の少い先生方は兎角写生かぶれで、西洋画の真似が好きなのがが多い」(「川端玉章翁を訪ふ」『太陽』四巻六号、明治三十一年三月)と嘆き、日本画の衰退を危惧している。玉章も時流に合わせて高橋由一に洋画技術を学んだ時期があるが、本図では洋画風の陰影表現はほとんど用いず、彩色の濃淡や墨のほかし、筆線のわずかな強弱によって、日本の四季それぞれの空気感までも見事に表現している。パリ万博に臨んだ玉章は、日本古来の名所絵と近代的な風景画の融合という実験的試みを行ったと考えられる。



(参考) 巖島密雪



(参考) 碓氷峠錦楓

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

名所絵から風景画へ——情景との対話

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 76

編集 宮内庁三の丸尚蔵館
制作 株式会社 東京美術
翻訳 黒川廣子
発行 宮内庁
平成二十九年三月二十五日発行

© 2017, The Museum of the Imperial Collections, Sanjōmaru Shōzōkan